

広島都市学園大学 健康科学部保護者の会 会報



第11号

発行 広島都市学園大学健康科学部保護者の会
発行先 〒734-0014
広島市南区宇品西五丁目13番18号
TEL 082-250-1133
FAX 082-250-1134

【「こころ」の由来：広島都市学園大学の理念である「心技一体」の1文字からつけています。】

保護者会発足に当って

初代保護者会会長をつとめさせて頂きました柏尾康男と申します。この度は保護者会発足から今後の未来にこのようなことも大切に行っていくという願いも含み筆を走らせています。

先ず保護者会発足に当たり、保護者会がどのような機能を持ち、仮にお金を徴収しても公正かつ、有益に利用できるかの目的は、見透しが出来ませんでした。父兄の答弁も的確に返答ができず、次回継続審議になり、二歩進んでは一歩下がる悪戦苦闘の末、規約も出来、工程に於いては7月着手、翌年の4月の総会に上申することが出来、承認頂きました。これも当時の理事長・事務方・役員8名が知恵を絞り双方協力があった保護者会と思ひ皆様方に深くお礼申し上げます。

広島都市学園大学と卒業生

卒業生とは、その姿が世間に映し出される画像であると同時に広島都市学園大学としての永遠の財産ではないでしょうか(ある大学の卒業式の訓示)。また大学が若いため設備等の問題も不足しているかもしれませんが、着実に進歩していると感じています。教育理念として「調和・啓発・創造」、建学の精神である「心



技一体」の教育を施し、世に送り出した卒業生が、いかに活躍するかで大学は評価されます。一方、卒業生にとって広島都市学園大学は自己の成長に大きな影響を及ぼす教育機関であり、卒業後も一生にわたり母校で学習したことを生かして社会に貢献することが出来ます。私が社会に巣立った昭和40年代初期は、社会経済は右肩上がりに成長し全員が希望の就職につけました。しかし時代の流れは厳しく、石油ショック・バブルの崩壊を経験して、日本の経済の強弱を経験しました。

皆様には医療系の業界に貢献するため、地域の皆様、患者の皆様信頼を得るため、地道に努力して頂きたいと思っています。そうすることが、いずれ広島都市学園大学の評価を高めることに結び付くと思います。母校の発展なくして卒業生の評価の向上はあり得ませんし、その逆もまた真成なりといえます。広島都市学園大学の卒業生として高い財産価値を得る努力、既卒の方々のみならず、今後、広島都市学園大学の同窓生となる後輩の皆さんの努力も重要になると考えます。

今後の同窓会活動について

同窓会についても立ち上げ活動が進んでいると聞いています。同窓会の発展を祈願します。同窓生にとって、公の病院、民間の病院、年齢、肩書に関係なく、卒業生は、みな平等であり自由な発想と発言が出来る集合体であったし、今後、広島都市学園大学が大きな智慧を発揮され、新学部設置等による異職種クラスが

構成される時代が近い将来訪れます。職種の隔たりに越えての交流や親睦を可能にするためには、先ず同窓会に一人でも多くの方に興味を持って頂くことが出発点であります。そうすれば、人間関係も活発になり、やがて会員相互に有益な繋がりが生まれると思います。卒業して社会人として一人前になるため、目の前に与えられる数々の仕事をこなすだけで、フル稼働の毎日です。社会人として成長して、職場から認められるようになるまでは、大変な努



力が必要です。母校や同窓会のことまで、とても考えが及ばないのがむしろ普通です。私も45歳までは、まさしくそのような心境でした。が、その年齢を過ぎると、時間を造ろうと思えば融通がつくようになり成ります。

これからは若い大学でもあり、健康科学部が先頭に立ち、子ども教育学部とタッグを組み同窓会貢献に力を注いで頂きたいと思っています。前述の通り、広島都市学園大学と卒業生との理想的な関係と考える同窓会活動になるように、OB、在校生の皆様よろしく御願い申し上げます。

2代会長 (現・顧問) 丸山英治



保護者の会設立から今日まで振り返って見ると、目標にむかって頑張っている学生たちを学園と共に支援してゆくことを、目的に設立してきましたが、その支援方法について、いろいろ模索し議論をかさねてきました。保護者、学生の中からご意見をいただき、その中で可能な限り解決に向かうよう学園側に検討いただいた例もたくさんございます。ゼロの状態から組織を立ち上げて行く難しさを痛感し、今日に至っています。

その間、保護者としてわが子はもちろん学生たちの大学生活を知る必要性それと共に、大学を知る必要性が大だという事、学生を支える組織の必要性を常に感じていました。

わが子が入学した当初は、本校は開校3年余りの大学であり、設備的には新しくこのようなところで学んでいく環境はさぞかしいだろうと、感じていました。後は成人となる子供に任せておけばいいそう思っていました。が、かつしてそうでは有りませんでした。学園からの説明を聞いても、いろいろな面で知らないことだらけ、保護者として不安感を覚えました。そんな折保護者会設立の説明会があり、そこで設立準備委員に立候補し、そのまま役員となり、役員会を通していろいろな議論を行いその結果、大学の状況が少しずつ理解していくことが出来ました。大学自体これから発展すべき要素がたくさんあるなと感じました。これまでの保護者の会活動振り返り、思い感じた事お伝えしたいことを述べさせていただきます。

せていただきたいと思っています。一つには健康面での問題です。体調管理を自分自身で管理する必要があると思います。保護者の皆さんも一歩気になるところだと思ひますし、同様に学園側も一番重点に考えているところだと思ひます。実際、健康科学部の学生は医療関連の職場に向き校外実習することになります。無論体調不良だと実習を受ける事ができません。結果単位が取れず進級できない結果を招いてしまう事があるのです。将来の職場はもっと厳しい社会です。学生の間に自分の体調管理方法を第一に学んでほしいと思います。

入学当初は、ほとんどの学生が未成年です。成人として必要なマナーや言葉使いなど、思考力を含めいくつかの弱小な面を感じてなりません。学園内での問題に学生側に原因があるケースが多くあるように思います。学生は4年間の間にいろいろな人と出会い経験をし、変わります。成人としての自覚を持つようになり、少しずつ成長していきます。保護者としてわが子を社会に認められる成人に育てる努力をしていますか？あなたは、わが子と、うまくコミュニケーションをとって、意見交換などできていますか？と聞かれると、胸を張って答えることはできません。そして、わが子について全てを知る事はできません。その中で支援していくためには、せめてわが子の将来についての考え方、学園内での学習の様子など少しでも知る必要があると思います。そのためには是非、保護者の会で提案された保護者懇談会や、本学園でのチュウター制度をしっかりと利用していただきたいと思っています。こうした親の協力が国家試験合格に結びついていくと私たち保護者会は考えています。進級、卒業、就職、国家試験合



平成30年4月の健康科学部保護者の会総会で承認されました次の寄付がございました。

看護学科は、情報処理教室のパソコンを入れ替えました。平成21年開学以来使用していたパソコンが老朽化して、故障が頻繁に生じるため学生の資料作成等に支障のある影響がありました。今回、保護者の会からのご援助によって、情報処理教室のパソコン全てを更新することができました。今後は学生の看護研究等が円滑に進められることになりました。



格と目標に向かって、保護者の会はこれからも学生と保護者のために設立目的を踏まえ邁進して頂きたいと願っております。最後に、今日まで保護者の会を支えていただきました。総長をはじめとする大学関係者並びに保護者の皆様に感謝申し上げます。今後、保護者の会活動に對しより一層のご協力を賜ります様折念いたします。



リハビリテーション学科への寄付は、自習室に設置していますデスクトップ型のパソコン5台とプリンター1台が古くなりましたので、同数のWiFiが可能なノートブック型パソコンとプリンターを新に設置していただきました。インターネットに接続された環境で、混雑することなく自由に学生が自習することが出来ます。

加えて、学生用の有料コピー機が混雑することから、もう1台増設していただきました。

寄付されましたコピー機は、オートドキュメントフィーダー(ADF)が付いています。コピー料金も安く、大きさに関係なくモノクロは10円、カラーは20円としました。この度、寄付されたノートブック型パソコンからの出力もできます。このように本学施設充実へご協力いただいた保護者の皆様へ心よりお礼並びに感謝申し上げます。



看護学科同窓会 を設立

広島都市学園大学
看護学科同窓会

会長…土屋 有紀 子
(旧姓…河元1期生)

広島都市学園大学健康科学部看護学科は、今年度10年目を迎えています。

6期生までの卒業生を輩出し、様々な分野で活躍しております。

このたび平成30年3月24日に、広島都市学園大学看護学科同窓会を設立しました。今年度中に第1回同窓会総会の開催を予定しております。

今後、同窓会活動としては卒業生および広島都市学園大学看護学科のさらなる発展を図るために活動していきます。

平成30年度 進路相談会 学生参加報告

看護学科 広報委員会

平成30年5月19日(土曜日) 13時～16時30分に広島県看護協会会館3階大研修室において、高校生のための「進路相談会」が開催されました。主催は広島県看護協会、本学からは広報委員会関係教員2名と事務職員1名、看護学科3年生、藤原郁也君が参加しました。この進路相談会は毎年、行われていますが、その中で体験発表(助産師、看護師、看護学生)があり、看護学生の発表は5年に1回くらいの頻度で回ってきます。本学の発表は久しぶりであり、今年は6

大学と1専門学校の説明があり、各学校8分の発表時間で、スライドや動画を使用し発表されました。



藤原君は本学で体験している学生生活や学生としての声を発表し、本年度は

①動画などを用いて本学の楽しい雰囲気伝える、

②本学の精神や特徴である茶道・華道・江田島の「コミュニケーション技法」研修などをより丁寧に伝える、

③本年度より大学院が設置され、学業の発展の可能性など、自分の進路に幅ができたことなどに重点を置いてプレゼンテーションを行いました。看護学生としての楽しい体験を発表し、わかりやすいだけでなく、高校生が本学について興味を持ってもらえる内容であったと思います。

看護学科江田島 研修を終えて

看護学科2年生

澤田 拓治

私たち看護学科1年生と2年生はコミュニケーション技法の講義とし



江田島研修を終えて、私が一番印象に残っていることは「カッター研修」です。カッター研修は江田島で

て、5月27日から29日まで二泊三日の江田島研修に行ってきました。この授業の概念は、ひとりの人間として豊かな人生を創出するため、江田島研修を通して人間としての基本的な生活習慣や幅広い人間関係を形成することです。また、私たち看護学科はこれからの将来、看護師にとってなくてはならないコミュニケーション能力をこの研修から少しずつ身につけていきます。一年生は入学して間もないので、コミュニケーションを用いて、横のつながりを形成するとともに、一年生と二年生の縦のつながりも形成すること、一つの目的でもあります。今回、私はこの江田島研修のリーダーとして参加させていただきました。去年もこの研修に参加していたのですが、去年の研修では一つ上の先輩方がしっかりと企画し、引っ張っていただくだったので、とても充実した研修でした。

私は今回の研修は去年よりも充実した研修にしたいと思い、リーダーに立候補しました。リーダーを中心に、2年生9名の実行委員が企画・運営をしました。



できる、みんなで協力しながら一つの船を漕いでいくスポーツ研修です。ただ、このカッター研修の面白いことは「笑ってはいけない」ということです。カッターは死と隣り合わせの危険なスポーツです。もし、ふざけて自分や友達が海に落ちてしまえば溺死してしまうかもしれない。だからこそ、ふざけたり笑ったりしてはいけないところにとっても強い印象を受けました。



江田島は青い海の色や木々の緑が濃い空間で、澄んだ空気など心身を生き返らせてくれる場所でした。勉学で忙しい大学の環境から場所を変えることは息抜きになりました。

今回の二泊三日の江田島研修は様々な研修やスポーツ、レクリエーションを通してコミュニケーション能力を身につけていきました。私はリーダーとしてどうすればみんなをまとめられるだろうか、どんな企画をすればみんなが目的を達成できるだろうかを考えました。企画を手伝ってくれた同級生の力や先生方のお力もお借りして、最後までリーダーとして江田島研修を終えることができた。この体験はこれからの将来大きな自信になると思います。自分の理想の看護師になるためにこれから頑張っていきたいと思っています。



理学療法専攻3年
柴田 理沙
高津 静

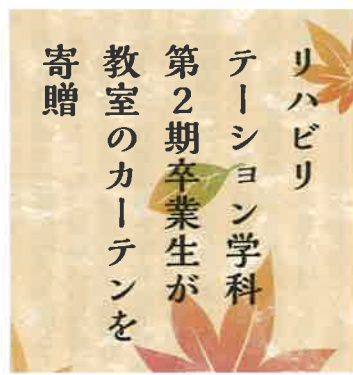
私たちは2018年3月8日〜12日に韓国ソウルで開催された「第5回日韓理学療法学生プロジェクト」に参加しました。この企画はJPTSA(日本理学療法学生協会)とKPTSA(韓国理学療法学生協会)が交流することで視野を広げリーダーシップを発揮できる学生を育てることを目的に開催され、全国各地の学生が参加しました。

今回のテーマは「高齢者の未来について」でした。両国が英語でプレゼン発表をし、意見交換を行う中で共通点や相違点を見つけることができました。そこで驚いた点がいくつかありました。一つ目は理学療法士養成校数に大きく差があることです。日本が全国で261校に対して韓国は85校しかありません。それを知り競争率が高くなるなど感じました。二つ目は韓国の理学療法士は英語ができなければならないということです。



「第6回日韓理学療法学生プロジェクト」は11月17日〜18日に文京学院大学(東京)にて開催が決定しました。今回はお互いの国の最新理学療法をテーマにCYBERDYNEでの施設見学やレクチャー・プレゼンテーション・文化交流などを行います。隣の国である韓国の理学療法について知ってみたい、海外の学生と交流したいなどきっかけはどんなことでも大丈夫です。少しでも興味を持っていただけたならぜひ参加してみてください。とても良い経験になると思います。

国家試験が終わった平成30年3月5日に健康科学部リハビリテーション学科第2期生の卒業生が、西風新都キャンパス大学講義棟302中講義室のカーテンを寄贈してくださいました。この教室は真南に向いているため、天気の良いときは、ビジュアルプレゼンテーションが増え、頻りに使用されるプロジェクトからの光が太陽光に負けて薄く映写されてしまいます。そのため、後輩たちが受ける授業



大学図書館は、広島市立中央図書館と連携して、去年秋から「認知症にやさしい図書館」事業を行っています。

プログラムの一部をご紹介します。

11月30日まで、場所は、広島市立中央図書館2階自由閲覧室B特設コーナーで、この取り組みは、市民が認知症の正しい知識を得る、同時に認知症に対する偏見を減らすことを目的として実施します。

12月21日まで大学西風新都キャンパスで、作業療法専攻学生が市民を対象に認知症を正しく知るために選書した本を展示します。

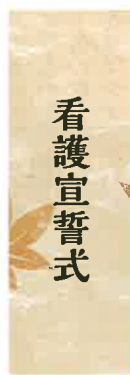
この取り組みは、市民が大学図書館を利用しやすくなる目的もありです。また、市民が認知症を専門としている本学教員に相談も可能です。



風薫る晴天の中、第9期生の看護宣誓式を4月21日(土)に、本学宇品キャンパス体育館で開催しました。ご来賓の実習施設の方々やご父兄の皆様が多数ご臨席くださり、看護師としての第一歩を踏み出す第9期生は平和都市広島象徴である「平和の灯火」を「ナイチンゲールの愛の灯火」として一人ひとりいただいたのち、実習グループのメンバーと一緒に宣誓に臨む心構えと夢を、心をこめて宣誓しました。

一年前に宣誓式をおこなった第8期生からあたたかい励ましの言葉もいただき、第9期生は患者さん

看護学科教員
松原 みゆき



4年間を笑顔で振り返る卒業生代表の皆さんと富樫学部長、山川講師です。



に良い環境を整備したいという気持ちから、卒業生たちが太陽光を遮断する専用のカーテンを寄贈してくださいました。



学生たちは、その例えが良く理

来賓の広島県看護協会川本ひとみ会長様から、「広島風お好み焼き」に例えて、広島では終戦後の物資の無い時代、原爆投下の影響で野菜も育たない時期に、小麦粉を水で溶かした薄い生地を魚粉等を散らして食べていた。これがベースであった。そのうち、野菜が取れるようになり、キャベツを混ぜて焼いていたものに「もやし」や「そば」「肉」などの具材を追加して今の豪華なおいしいお好み焼きができたように、皆さんは今、ベースのお好み焼き状態なので、これから学修をしてどんどん追加して、美味しいお好み焼きのように成長してほしい、とお言葉をいただきました。



んに信頼され、様々な変化に気づくことができる看護師になれるように、それぞれが新たな決意を胸にスタートラインに立ちました。

私は先日の広島県で発生した豪雨災害で被災された地域で災害ボランティアを行ってきました。ボランティアさせていだいた場所は広島県安芸郡海田町です。その地域は大学の友人が多く住んでいたり、実習でお世話になった病院もあり、その周辺も大きな被害を受けていることをニュースやSNS等で知り、何とか復旧・復興に向けて何か小さいことから考えて、被害の状況が日に日に分かっていくと同時にその気持ちも強くなっていくようになりました。そんな中壊れていた道が修復され

看護学科4年
山田 新一郎



解できました。人々の命を育み、苦しみを和らげ、学生の目指す看護師への成長を願う、心に残る一日となりました。

ある程度交通の便が整ったという情報を聞きボランティアに行くことにしました。



初めて海田町にボランティアに行ったのが7月15日です。その後も2回ほど活動させていただきました。

活動内容としては側溝の泥を取り出す作業や砂を袋に詰める作業やそれを一輪車で集積場まで運ぶというものでした。7月ということもあり真夏で日中は蒸し暑く、午後になると暑さはピークを迎え体感温度は長袖長ズボンそして手袋とマスクもしていたため、ゆうに50度近くはあったように覚えています。

初日には昼から特に気温が高くなり暑さのピークを迎えるためボランティアの人数も減ると考え、近くに住む大学の友人と海田町に住む友人と連絡を取り、昼から海田町に向かい活動しました。海田町に車で向かっている道中で土砂崩れや道路の陥没など海田町に近づくにつれ、いろいろな災害の爪痕が多く目立つようになっていきました。そして海田町に到着して民家と民家の間の側溝の泥をスコップで拾い袋に詰める作業を行いました。しかしその活動も20分活動しては10分休んで作業をしないと熱中症にならないように何とか考えながら活動しました私たちが熱中症になって、被災されている地区の方の御迷惑になってはい

けないと水分等しつかり熱中症対策をしていきました。しかし、海田町では町民の方自らが被災されているにも関わらず、ボランティアの人のためにお茶や塩飴等用意されていた。また定期的に作業の様子を見に来てその度に休憩を促したり、冷たいお茶を持ってきたりと、自分たち以外にもボランティアに来てくれる方全員に町民の方が体調を気にかけていました。そして何とか側溝の泥を取り除くことができ、近くの住民の方に「本当にありがとうございます」と言われました。

私は時間的にとても短い期間でしかボランティアに行くことができませんでしたが、たった数回のボランティアに行っただけでは意味がなく、定期的にいくことで初めてボランティアの意味があると思いました。そして、長期的なボランティアを行うことで復旧・復興に向けた意味のあるボランティアになると考えました。

今回災害ボランティアを始めて行い、いろいろなことを経験し、学ぶことができました。ボランティアに行く上で自分自身が気付けなくていけないことなど、この経験は自身今後看護師として、または保健師として働いていく上でとても大きな財産になったと思います。今後も復旧・復興に向けて被災地では人手等が足りない状況が続いていると思います。自分は今後も行ける機会があれば積極的にボランティアさせていた



だき、復旧・復興が一刻でも早く進むように関わっていききたいと思っています。

作業療法専攻2年 東 弥 洸

今年起こった、「西日本豪雨災害」のボランティア活動に地元的女性消防団の出務として参加しました。要請がかかったのは安佐北区と安芸区の避難所でした。活動内容は、避難所とその周辺の清掃です。

私は地元の女性消防団に入団して一年が経ちました。消防団の活動内容は地域の安全・安心を守るため、災害予防の啓発活動を中心に活動しています。例えば、AED（自動体外式除細動器）の使い方、老人ホームや学校、一般市民の皆様へ指導したり、救急車を呼ぶときの電話対応、熱中症対策など、日常で起こりうる危険を防止する活動をしています。今回は大きな災害だったので、消防署から依頼され、避難所の支援を行いました。避難所では、衛生面を考慮してトイレの清掃活動や、避難所の体育館の床の清掃・除菌を主に行いました。

私は、災害時のボランティア活動に初めて参加しました。参加する前の避難所のイメージは、東日本大震災でニュースになっていたように、物資が足りておらず食べるものが足りない、生活用品が足りない、家族や親せきと連絡がとれない、避難されている方が運動をしなかったり、体を動かさない為、エコノミー症候群になってしまいうなど多くの問題があると思っていました。

しかし、避難所になっていた体育館には、入り口に受付があり、避難されている方が共同で使うことのできる冷蔵庫などの電化製品がありました。一番驚いたことが、簡易な扇風機とクーラーが備わっており、外より涼しくなっていたことと、体育館には医療従事者がいたことです。医療従事者は避難されている方一人、一人に声をかけ体調管理、健康管理をされていました。私は、避難している方にい



ろいろお話を聞きたかったのですが、なんと声をかけていいのかわからず何も聞けませんでした。避難所の外に出ると、山から流れてきたのであろうグラウンドとは違う色の乾いた土。木が絡まり変形したフェンス。その奥には住宅街があり自衛隊の方と被災者が、家の中に入ってしまった土砂の撤去作業に追われていました。

避難所の清掃を行うことで、被災者から「きれいに掃除してくれて、ありがとう。」と言っていただけで、ありがたかった。こんなことしかできない自分にはやるせないと感じました。しかし、衛生面の必要性が、より良くなりました。

これからは多くのボランティアに参加し、消防団員として、医療従事者になる学生として、学んでいきたいです。

災害被災体験

看護学科2年

下 久 保 紅 乃

私は三原市に住んでいます。三原市本郷では沼田（ぬた）川の氾濫により周辺一帯は土砂崩れの発生とともに孤立し、2階に届くまでの家屋の冠水状態が続いていました。私は西日本豪雨災害を体験して沢山の

ことを学びました。テレビで見ているだけではわからない、味わえないことを沢山経験しました。そして、自分がどれだけ幸せ者なのかということも実感しました。

私が今回、豪雨に被災して、一番初めに思ったことが「人間は平等ではないんだ」ということです。私たちが普段、普通に生活していることがどれだけ幸せなものか、ということをもっとよく感じました。テレビのニュースなどでも、このようなこと、自然災害のことを何度も聞いていたし、自分でも分かっていたつもりでしたが、実際、自分が体験し、豪雨に被災する前とは全然違う、何か新しいものを感じることができました。家から出て見える景色は本当に言葉では表せないくらいインパクトの強いものでした。360度どこを見ても川から溢れた水、その水で湖と

なった町、流れている車、家の屋根に登って助けを待っている人、スライパーもコンビニもココロラの工場も1階部分は水没、そのようなものばかりでした。私の自宅は流される等の大きな被害ではありませんでしたが、家の中でも断水、停電で私はどうしたらいいかわかりませんでした。SNSを利用して災害にあった時にとる行動を見ながら行動をし、地元の人とSNSで給水場所や支援物資等の提供場所の情報交換を行っていました。

数日してから水が引き、近隣の

家々の後片付け、土砂で埋もれた道路の整備等の応援に行っていました。が、「この場所はあと、どれくらいで元に戻るのだろう」とそんなことを片付けている時に何度も思いました。片付けていても「少しはきれいになったかな。」と思えば、振り返るとまだまだ漂流物の山々、「本当にこの作業が終わる日が来るのだろうか」と思いました。冷房なしの応援作業で頑張りましたが、最後には自分が発熱しました。



平成30年度 定期総会報告

4月28日(土)に定例総会が開催され、前年度事業報告・決算及び今年度事業計画(案・予算(案))ともに承認されました。続いて行われた懇談会で次の方々が役員(理事)に推薦され、7月役員会で皆様を迎えました。

新役員は次の5人の方々です。

看護学科

・江島 阿弥 理事
・松本 正代 理事

リハビリテーション学科

理学療法専攻
・三好 久美子 理事

作業療法専攻

・高取 裕美 理事
・平野 麻実子 理事